

冷えに関連した愁訴の漢方治療

—めまい・ふらつきについて—



川越 宏文 先生

ちぐさ東洋クリニック

1988年 久留米大学医学部 卒業
同 年 宮崎医科大学 第1内科 入局
1994年 東京女子医科大学付属東洋医学研究所 助手
2000年 東京女子医科大学付属東洋医学研究所 医局長
2003年 東京女子医科大学付属東洋医学研究所 非常勤講師
2009年 ちぐさ東洋クリニック 院長

はじめに

西洋医学ではあまり注目されない「冷え」に着目することで、日常診療でよく遭遇する不定愁訴に漢方薬が奏効する事例をしばしば経験する。今回は、冷えを有するめまい・ふらつきの2症例を紹介する。

症 例

【症例1】 77歳 女性

主 訴：ふらつき

現病歴：15年前から高血圧症に対し薬物療法が行われている。10年前に激しいめまいが出現し、以降も断続的に継続している。1年前から起床時や季節の変わり目にめまいが出現するようになり、ベタヒスチンメシル酸塩が処方されているが、症状が改善しないため受診した。

現 症：図1に示す。

経 過：めまいは「くらっ」という感じの非回転性

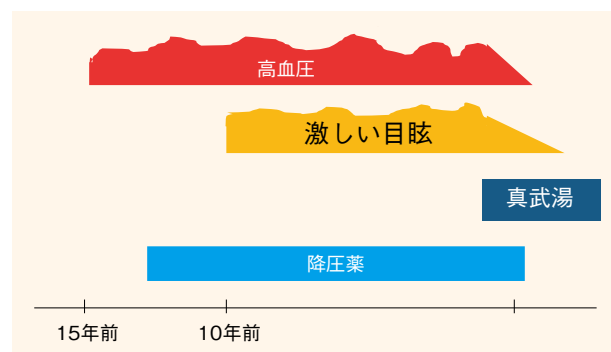
図1 症例1の所見(77歳 女性)

身長 150cm／体重 45kg／血圧 154/88mmHg／脈拍 90/min
体温 35.9℃／総コレステロール 244mg/dL
LDL-コレステロール 150mg/dL／中性脂肪 67mg/dL
貧血なし／甲状腺機能正常／心電図正常
Romberg test：異常なし／finger-nose test：異常なし

食欲良・睡眠良、大便1行/日、夜間尿2回
体が冷える、耳鳴りがある
脈候：沈虚
舌候：やや薄、淡白舌、微白苔、齒痕舌
腹候：腹力弱、腹壁薄
目眩は「くらっ」という非回転性目眩

のめまいであり、冷えと脈候が沈であることから真武湯を投与した。1週間経過後の来院時、起床後のふらつきは若干残っているものの改善傾向がみられた。さらに1ヵ月後にはめまいの消失だけでなく、血圧が正常化したため、長期間処方されていた降圧薬を中止した(図2)。

図2 症例1の経過(77歳 女性)



考 察：寺澤捷年先生は、真武湯の効果が期待できるめまいとして、「座位で安静にしているも地震が来たような動揺感が数秒間起こったり、直線上を歩行していると左右いずれかの方向に意図に反して斜行してしまうなどの前庭神経症状と考えられる症状を覚える」と考案している。

【症例2】 62歳 男性

主 訴：ふらつき、足冷え、のぼせ

現病歴：X年1月にふらついて転倒し、頭部を打撲

した。某大学病院脳神経外科で検査を受けたが異常はなかった。同年8月には午後になると、のぼせ、ふらつきが出現し、自律神経調節薬にても症状改善せず、趣味の登山もやめた。X+1年5月に足の冷えが増悪したため受診した。

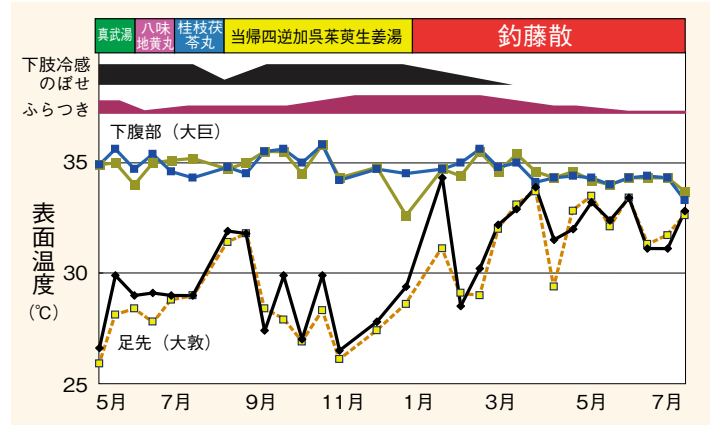
現 症：図3に示す。

経 過：真武湯を投与したところ、ふらつきはやや軽減したが、のぼせ・冷えは変化がなかった。外気温の低下で、ふらつきが増悪し、腰痛も出現したため八味地黄丸に転方した。

7月にふらつきは軽減したが大腿部に皮疹が出現したため桂枝茯苓丸に転方した。8月になっても下肢の冷えが続き、9月には冷えが増悪したため、当归四逆加呉茱萸生姜湯に転方した。11月にはのぼせ、ふらつきと足の冷えが増悪し、12月にはのぼせと血圧上昇のため釣藤散に転方したところ、足の冷えは軽減し、ふらつきも改善した。冬季にもかかわらず足の表面温度が上昇し、その後は下肢の冷えも消失し、3月以降は大敦と大巨の温度も30℃以上で推移している(図4)。

考 察：細野史郎先生は、「釣藤散は愁訴の多い患者に用いられ、特に頭痛が多く、頭重、肩こり、眩暈を訴え、さらに便秘・不眠・夜間尿・手足冷え・

図4 症例2の経過(62歳 男性)



心下痞え・動悸・耳鳴り・のぼせ・怒りやすい・食欲不振等がある。頭痛は特に早朝覚醒時、或いは休息時に現れる。動脈硬化性のものが多い。頭痛とともに易怒性・のぼせ・耳鳴り・不眠・眩暈等の神経症状が強く、また心下痞え、食欲不振等の消化器症状があらわれることも興味深い」と考案している。

まとめ

高血圧症の既往のあるめまいに真武湯を投与したところ、めまいの改善だけでなく血圧が正常化した症例と、下肢の冷え、ふらつき、のぼせに釣藤散を投与したところ、冬季にもかかわらず自覚的な下肢冷感の改善だけでなく皮膚温も上昇し、ふらつきも改善した症例を経験した。

Comments

後山：冷えの測定ポイントを腹と足先としていますが、何か意味があるのですか。

川越：代田文彦先生に相談したところ、漢方の治療効果をみるのであれば経穴を測定してはどうか、とアドバイスいただきました。

後山：症例1では、長年継続使用していた降圧薬が中止できたという、循環器専門医も驚くような素晴らしい症例だったと思います。

図3 症例2の所見(62歳 男性)

